

Title	今宮新著, 『初期日独通交史の研究』
Sub Title	Shin Imamiya, A history of the intercourse between Japan and Germany
Author	会田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.2 (1972. 1) ,p.93(229)- 97(233)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720100-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 批評と紹介

今宮 新著『初期日独通交史の研究』（鹿島研究所  
出版会刊）

会 田 倉 吉

今宮先生の『初期日独通交史の研究』が、昭和四十六年二月五日付で刊行された。先生はほかに専攻の分野を持っておられ、特にその班田収授制の研究は斯界に高く評価されているところであるが、この日独通交史の研究もまた先生としては実に昭和六年以来、四十年にわたって手がけてこられたもので、その意味では、対外交渉史に多少とも関心を持つものには、これこそまさに待望の書といわなければなるまい。

四十年前、今宮先生はヨーロッパへの留学にあたり、さきに恩師幸田成友先生がオランダで果たされてきた研究の刺激を受けられ、ドイツにおける日本関係の資料の研究に専念されて、主としてベルリンの日本協会（Japan Institut）および同市郊外のプロシヤ王室古文書館（Preussische Geheimes Staatsarchiv）にある当該資料を渉猟しつくされたのであった。

わたくしごとで恐縮ではあるが、先生の帰国されて二、三年後のこと、わたくしは先生のそのドイツでの採集資料を見せていただいた記憶がある。そのとき、ちょうどわたくしはペルリの日本

遠征にからむ列強の動きをテーマにして、卒業論文に取り組んでいた。指導教授には幸田先生をお願いしたのであるが、ある日、今宮先生をおたずねした機会にこのことをおはなすと、先生はそれならいいものを見せてやろうといわれ、大きなトランクを持ち出されて、なかからドイツ文の冊子の複写したもの一本をお貸し下さった。

それが、本書にも再三しるされているファイリップ・フランツ・フォン・シーボルトの著書 *Urkundliche Darstellung der Bestrebungen von Niederland und Russland zur Eröffnung Japan's für die Schifffahrt und den Seehandel aller Nationen*（二二—二二、一六四、一九九—二〇〇ページ等参照）、わたくしの論文には欠かせぬ資料なのであった。もちろんペルリの日本遠征記にも引用されており、またアレキサンダー・フォン・シーボルトの *Letzt Reise nach Japan* などからも概要はしのばれるが、原本を手にするのははじめてで、縦二一・五センチ、横一五センチの大きさの、写真版とはいえ、それは原本のままのものであった。

わたくしの手もとにいま、それをそっくり筆写したノートが保存されていて、はじめに「今宮教授より借用、1939. 1. 5日（日）書写し畢る」と横書にしている。一九三九年ではすでに卒業後になるから、のちにまたお借りして写しとったものと思われるが、こんなにちのように複写の手段の発達していないころのこととて、こんな手間をかけたわけで、とにかく思い出の多いことで

ある。そして、その冊子を出して下さるときに、先生はこれが全部ドイツでの収集資料であるときかせてくれたものであった。学生の身にはその真価が十分にはわからないながらも、ただ驚歎せずにはいられなかったのを覚えている。

さて、先生のそれらの資料にもとづく研究成果はおおむね本誌『史学』に少しずつ発表された。まず第十四卷第一号(昭和十年四月刊)の「プロシヤ古文書館に於て見たる二三の文書に就いて」(本書の付録中の一編「シーボルトのことども」がこれにあたる。)、第十五卷第四号(昭和十二年二月刊)の「アレキサンダー・フォン・シーボルト」(本書にはやはり付録として同じ題名で収められている。)などがそれで、わたくしはまだ在学中であったのである。

その後、しばらく年を経て、第二十四卷第二・三号(昭和二十五年十月刊)には「ベルリンに於ける我国最初の遣欧使節」(この一編が本書では第二編第三章になっている。)、さらに十年ほど間をおいて、昭和三十六年からはいっそうまとまったかたちで、その研究成果があいついで公にされはじめた。第三十四卷第二号(昭和三十六年十二月刊)の「初期日独通交史の研究(一)」(本書のはしがきから第二編第一章第三節までに相当)、同巻第三・四号(昭和三十七年三月刊)の「初期日独通交史の研究(二)」(本書の第二編第二章第一、二節に相当)、第三十五卷第一号(昭和三十七年六月刊)の「初期日独通交史の研究(三)」(本書の第二編第二章第三、四節に相当)等である。

こうして、いわば断続的にすすめられていたこの研究が、昭和三十六年にいたってにわかに進展を見せるようになったのは、「はしがき」や「あとがき」に先生自身が述べられているところによると、その年がたまたま日独修好百年の年にあたって、あれこれの催しなどがしきりに行なわれたりしたため、それが再びこの研究への興趣をよびおこす機縁になったからであるという。そういえば、その前年、日米修好百年の記念諸行事が催されたときには、わたくしもいささかかわりをもち、そのことからかつての日米交渉史についての研究に思いをよせた経験がわたくしにもある。時には、つまらぬお祭りさわぎの記念行事などという感じもないではないが、それも決して無用でばかりないことを知るべきであろう。

ただ、わたくしなどの場合にはそれがそのとき限りの感懐でおわってしまいがちなのに、今宮先生はそれをこのように発展させ結実させて、いまここに四十年來の研究成果を世に問われる直接の動機となさったのである。しかも、この成果の公刊は先生の古稀の記念でもあるとき。いかにも慶賀に堪えないことであり、加うるに、この出版はひろく学界のよろこびでもあって、われわれ後進へのこのうえない導きになるものと信じる。

ところで、つぎに本書の構成を一覧してみると、全体はA5判総ページ二七〇を数え、口絵にプロシヤ王室古文書館の全景およびオイレンブルグ書簡の一部の写真を載せ、内容の主体はこれを本編(三一―一五六ページ)と付録(一五九―二四四ページ)とに

大別して、それに目次（一一三ページ）、あとがき（二四五―二五一ページ）、人名索引、件名索引、引用文献索引等（一一一―一五ページ）が添えられているのである。

なかでも、本編たる「初期日独通交史の研究」は「はしがき」にはじまって、「第一編序論」「第二編本論」「第三編結論」の全三編から成り、最初は研究の範囲や資料について説きおこし、本論にはいつて「わが国の開国とプロシヤの動向」（第一章）、「日普条約締結の研究」（第二章）、「プロシヤにおける文久遣欧使節の研究」（第三章）等を論述し、おわりには明治維新に対するドイツの態度や明治開国についてのドイツ人の役割などをするして、だいたいが前述の『史学』掲載論文を骨子としている。

ついで、付録にはこれも同じく『史学』掲載の先述の論稿のほか、やはり同誌の第三十六卷第二・三号（昭和三十八年九月刊）に引きつづき発表された「ヒュースケンのことども」なる一編を、「ヘンリー・ヒュースケン」と改題して収め、別にプロシヤ古文書館に関する記事三編を加えて計六編を録載しているのである。

したがって、本編・付録とも必ずしも新規の論稿とは限らないが、しかし決して単なるそれらの寄せ集めではなく、各編ともかなり丹念な添削がほどこされ、新たに調べあげられた点も周到に補なわれていて、全般によほどととのつたものとなっている。たとえば、第二編第三章における相当数の日本側資料の補充、付録の「ヘンリー・ヒュースケン」における詳細な附記追加などの

ごとく、すぐ目につくものもあれば、表題のつけかえや項目の分けかえとか、細部にわたる字句の訂正などにいたるまで、ほぼ間然するところなくそれは行き届いているのである。若干の誤植のたぐいはともかくとして、まずは晦渋のふしをおよそのこさないといっている。さすが年期のほどをしのばせるものといえよう。ことに、くりかえしているが、本書の最大の強味であり、同時に重要でもある点は上記のとおり、これがプロシヤ側の根本資料を徹底的に調査したうえで、それにもとづいて書かれていることである。かりにいま、それをプロシヤの極東遠征費の細目（六九ページ以下）ひとつにとってみても、そのようなまの文書の強味が十分にしのばれようし、あるいは文久遣欧使節を通じてプロシヤ国王に捧呈した將軍の親書に関する叙述（二二―四四ページ）などでも、行間におのずからその親書を手にしたものの実感がみなぎり、そのことは付録の「プロシヤ古文書館の思い出」中この親書に関する記事（二四〇ページ）を読みますむに及んで、それでこそ納得されるわけである。

また、時に同一文書の訳文が違ったことばで引用されていたりして、各編の執筆時期の隔りを思わせることもないではないが（九八―九九、二三八―九九ページ所載のブランデンブルグ伯の報告などはその例で）、かえってそれが規格の訳語に制約されない原資料の味わいを伝えてさえくれる気がする（ただし、このなかの数字には誤植とおぼしきものがみとめられる）。ましてや、プロシヤやオランダが遣欧使節の接待費のかさむのに僻易して、内実はこ

れを敬遠していたらしい様子などは、日本側の資料だけではうかがうべくもない興味あることがらといわなければなるまい。

のみならず、今宮先生がそれらのプロシヤ側の資料をいかに隈なく探究されたかは、ところどころにプロシヤの古文書館にはないものをきっぱりないといきっておられることからもうかがえよう(二二、一二七ページ等参照)。同様に、いくつかの資料の異同についても、しばしばたいへん明快な論述が見られ(たとえば、二〇六ページあたり)、全体を通じての克明な比較を経てのちに、はじめてこれはいえることではなければならない。

それらの原資料を実際に手にしておられた若き日の思い出もさることながら、真にこれだけの傾注があったればこそ、それらに対する愛着もそれらをめぐる感懐もひとしおなのであろう。そのことは「あとがき」やプロシヤの古文書館に関する付録の論稿などでよく察しられる。しかも、戦後はそれらの原資料の行方が判然しないとすれば、いっそうその感は深く、それだけに先生の採集資料の貴重さも増すことになる。

それにつけても、痛感させられるのはこのような基本資料の保管のことである。国としてはわが国にもようやくそのことが実現の段階にいたってきたし、東京都には都の古文書館がある。慶応義塾にも義塾としてのそういう施設をぜひ望みたいものである。今宮先生はオランダで印刷された文久遣欧使節一行の名簿につき、「この印刷物はわが国に存することと思われる」としておられるが(一一三ページ)、慶応義塾図書館には現に、そのときの

記念メダルだけでなく、明らかにこの名簿も一部秘蔵されている。それなのに、それが見落されるというのは、ひとつにはそういう施設機構にいたらぬものがある故ではなからうか。そんな気がしないでもない。

それから、本書の本編が取り扱う範囲は、日本の開国から文久遣欧使節の派遣までを中心とし、日普条約の交渉経緯やその後の両国関係の詳細は割愛されている。つまり、「初期」と題する所以であり、これを先生は結論の末尾に「日独交渉史の序論の一部をなすに過ぎないものである。」(一五六ページ)といっておられるが、もとよりそれにはそれなりの意義が存しよう。すなわち、諸列強のあとを追いつながらも絶えず東亜に注意を向けて、交通も情報もいたって未発達なその時代に、たいへんな困難を排し危険をおかして、フラウエンロープ号の沈没のような犠牲をはらってまで、日本との通交を望んできた往時のプロシヤ側の諸事情が少なくともここに鮮明にされたのである。

先生はまた「日普通交史は、日米、日露、日英、日蘭等の通交史に比べて、その重要性においても、または興味のポイントからみても、研究すべきものが少ないと思われるけれども、」(七ページ)とも述べられているが、それだけにどちらかといえば比較的未開発の分野にこのような成果をあげられたことはむしろ特筆されるべきであると確信する。

最後に一言。思えば、学者の仕事というものはずいぶんと息のながいものであるが、そのたゆみない先生の史学者としての経歴

のあらましを先生はかえりみて「あとがき」にしたためられ、本書を夫人にささげる献辞をもって結んでおられる。まことにゆかしくも、うるわしく、いよいよ清栄を願ってやまない次第である。それと、本書の刊行に助力を惜しまなかった方々の労に対しても、あわせて大いに多としたい。(四六、三、一四)

Hammond, N. G. L. and Scullard, H. H. (ed.)

### The OXFORD CLASSICAL DICTIONARY

Oxford Clarendon Press, 1970 2ed. \$6. 30.

真下 英信

古典時代と一般に呼ばれている古代ギリシア、ローマに関心を持つ人々にとっては、専門家であろうと素人であろうと或いは関心分野が文学であれ歴史であれさらには科学史であれ、何らかの古典辞典を座右に置く事が絶対に必要なのは改めて言うまでもあるまい。何か本を読んでいる時、不明な項目が出て来てもそれが少し特殊なものであると大体普通の辞典類には記載されていない。図書館に行って大辞典を調べればすぐに解る事は知っている。しかし「我々」凡人は大概「後で」と考えて放って置く。そしてそのまま忘れてしまうものである。

こうした時に自分の手本に辞典を持っておれば、しかもなるべく多くの種類の辞典を持っていればいる程、図書館に行く途中の道路の混雑を心配したりする事なく唯手を伸すだけか僅か二、三

批評と紹介

歩往復四、六歩で容易に調べることが出来るのである。いわば、手を出すだけで幾千年もの昔の世界に入れるのである。この事はさらに、古典文化をその母胎としていっていると云われているヨーロッパ文化に関心を懐いている人々にとってもその研究分野の如何を問わず言えよう。詳細な点はともかくとして、古典文化は周知の如くヨーロッパの精神生活の一つの大きな礎石を形成しているのである。

こうした歴史を背景にしてであろうか、ヨーロッパでは特に十九世紀以来多くの辞典が編纂されており今日でも又大小様々の形で出版されている。例えば古典辞典と言えはすぐに誰れでも思い出すのは、Pauly の書を基に、Wisowa, Kroll それから Ziegler など多くの編者による、十九世紀末以来未だに続刊中のドイツの辞典編纂の真髓を示していると言える Realencyclopädie der classischen Altertumswissenschaft である。本書はしかしながら辞典と言っても、しばしば膨大な論文の如き「解説」があり、Hight. G. も述べているように文中にむやみと引用や注釈それから略号が挿入されており読みにくくその上「悪文」ぞろいでも一般向きとは言いがたい。

他方小辞典の方はどうかと言えは、ペーパーバックのものを始めとして実に無数と言って良い程の種類が出版されている。これらの内で、Harvey P. The Oxford Companion to Classical Literature などは題名から推定されるように少し内容は特殊なものだが、簡潔で大変読みやすく便利である。しかし、本書に

(一三三)

九七